「執着のない関心」

壮年会Ｃ地区　有坂　文雄

「知恵とはすなわち死に直面しても人生そのものに対して執着のない関心（detached concern）を持つことである。・・・しかもあらゆる知識の相対性を意識し続けている。」（神谷美恵子『こころの旅』第八章人生の秋より）

10年程前に人間ドックで初めて「要精密検査」となったとき、そして４年ほど前に、たった一日でしたが入院して、初めて具体的に「まずいことになった場合」について考えました。幸い、たいしたことはなかったのですが、父も祖父も70歳になる前に脳梗塞・脳溢血で他界していることから、70より前に死ぬことになっても不思議はないのだ、と思うようになりました。過去の10年間を考えますと、これからの10年などはあっという間に過ぎ去ってしまうことでしょう。

まだ仕事や趣味でやり残していることがいくつかあること、今急に自分がいなくなると困る人達（家族、学生）がいることなどを考えますと、「お迎えが来る」のはもう少し後になるといいと思いますが、残りの人生は、なかなかやりたいことをすべてやり終えてから了える、というように都合よくはいかないでしょうから、それでは残りの人生をどのように生きるか、ということが問題になります。

それで思い出したのが、冒頭の言葉 "detached concern"ということです。"detached"というのは、自分から突き放して客観的に見る、執着しない、という意味のようです。"concern"は関心、興味です。これからもどんどん新しいことを吸収し、古き知恵をも探り、人と交わり、心豊かな人生にしたいと思いますが、未練を残さず、それまでの人生を感謝しながらこの世を去ることが出来たらいいな、と思います。

母がアルツハイマー病で入院した後、姉と一緒に、もうおそらく帰ってくることはないであろう母のアパートの整理をしました。その時思ったのは、人は裸で生まれ、裸で世を去って行かなくてはならない存在だ、ということでした。自分が集めた本、趣味のものなどは病院には持って行くことは出来ません。もちろん、あの世にも持って行けない訳です。今持っているものはすべて神からいただいた借り物であって、この世を去るときにはそれを喜んで神様にお返しする、そういうことではないかと思いました。つまり、今は「捨てられないものだらけ」の中で生活しているが、その時になったらいつでも喜んでお返しする、そういう気持ちでこれからの人生を過ごしていけたらと思いました。